札幌への初旅

武田久吉

日本博物学同志会の発起人であり、また中心人物であった小熊 桿君（後の三島の遺伝研究所長）は、明治三十八年（一九〇五）の春、北大の前身のまた前身である札幌農学校予科の入学試験に合格して、単身札幌に赴いたが、翌春、会誌『博物之友』に「札幌通信」なるものを送って来たのによると、羨しいような環境。東京ではチョット見られないような種類の花の褥に坐ってエルムの梢を仰ぎ、雪降るところには必ず有るという自由な空気を呑吐している様子が窺われるので、せめてその地を訪うて一―二週間でも、そんな状況に浸ってみたいと、望北の念に駆られずにはいられなかった。本州の高山に生ずる植物が、寒地にはどのような生活をしているかを知らんがために、北海道を本拠として、やがては千島列島を片端から探り、カムチャートゥカに渡り、あわよくばアリューシャン列島からアラスカの植物相を見たいという野望を抱いていた私は、三十九年（一九〇六）の初夏、札幌訪問を思い立ったのである。

ハッピーメイも過ぎて、草木の生育酣な六月初旬を予定していたのだが、五月の末から一週日を日光山に送ることとなって、幸いにも残雪に飾られた金精峠の頂上で、何人もまだ見る機会を得ないでいたアヲジクスノキ（一名ヒメウスノキ）の花に初見参したりして、楽しい日を送ってから帰京するや、ただちに札幌行きの準備にとりかかった。

そのころの鉄道は、東海道線以外はまだ国営でなく、多くは民間経営の私設鉄道であった。上野駅から出るのは日本鉄道株式会社の東北本線と、日暮里から水戸・日立を経て、宮城県の岩沼で東北本線に連絡する常磐線、それに上野から高崎にいたる信越線。そのほかでは、飯田町駅から八王子までの甲武鉄道といったものや、山陽鉄道などがあった。

六月十二日、午前十一時四十五分、上野発の急行列車で青森に向うことにしたが、当時、俗に海岸線と呼ばれた常磐線によった。三時間の後水戸に着いたが、近頃の鈍行よりもよけい時間がかかった。午後八時四十分に仙台着。当時はまだ寝台車が無かったから、座席に腰を掛けたまま面壁同然の姿勢である。

十三日、午前三時に尻内の近くで明るくなった。この辺では植物相が東京付近とは幾分異なるように思われた。わけても目をひいたのは、紅い花のハマナシであったが、その当時にはハマナスとばかり思っていたが、大正時代に、これはハマナシが正しいのだろうと考えたので、種々考究の結果を『植物学雑誌』第三八七号に発表したが、大多数の植物学者は、この雑誌を読まれないものか、依然、ハマナスを用いてハマナシを採らない。牧野先生も最初はなかなか肯定されなかったが、大正十四年に発兌の『植物図鑑』第二〇三図「はまなす」の条下に「はまなすハはまなしヲ誤りタルモノナリ」と誌し、後、昭和十五年発行の『日本植物図鑑』には、ハマナシが正名として採用してあるし、その前年五月発行の『実際園芸』第二五巻第五号の誌上に、ハマナシが正しくて、ハマナスの誤りなることを堂々と発表されたので、この問題はこれでケリがついたと見てよろしかろう。しかし、門外漢の中にはいまもってハマナスが本当だと思っている者があるとみえて、急行列車の愛称に「はま

なす」というのさえあったのを覚えている。

午前七時に青森に到着。いまならただちに連絡船に乗り移れるのだが、そのころには桟橋が無いのだから、艀で本船まで漕いで行くという始末。それ故風波のある時は一大事。それで一応は旅館に落付いて一浴。おもむろに乗船の準備をする次第。通行税という悪税を加えて四円四拾銭を払って室蘭まで、肥後丸という汽船に搭乗。十時に出航。海上からは、八甲田山が低い前山をふんまえてそそり立つ姿は勇壮である。

午後四時、函館到着。乗り合わせた二等船客はほとんどすべて上陸してしまった。五時に夕食。八時出航。翌朝三時に室蘭に入港。洗面を済ませてから、艀で上陸。「丸い」という旅館に投じ、入浴を済ませ、朝食。六時十五分発の、当時、室蘭〜小樽間を往復していた炭礦鉄道に乗って札幌に向った。正午札幌に安着。小熊君は竹田という彼の友人と一緒に出迎えてくれて、学校の正門近くの仮寓に案内してくれた。

午後は見物かたがた友人と外出、農学校の構内のエルムの巨樹を仰いだり、東京では見られない環境を楽しんだ後、学校の寄宿舎で夕食をふる舞われてから、宿に戻った。

札幌滞在の毎日はなかなか忙しかった。見物ということもあり、学校の先生方、わけても宮部博士には、四、五年前に、東京で瞬時お目にかかったことはあっても、親しく面晤したのはこの時が最初であった。先生は快く植物標本庫に案内して下さって、整然と保管されている標本や、参考書に充実している書棚を見せて下さったが、そのころの東大の薄暗い標本室とは雲泥の差であった。先生はまた、その前年マクカリヌプリで採集された高山植物の標本をたくさん頒与して下さったし、またいろいろと札幌に関する珍しいお話しに少なからぬ興を覚えた。

その後、先生をお訪ねした折り植物園に案内して下さったが、ここには、先生の植物採集旅行に扈従した金田一という忠実な老人が草木の世話をしていた。その前、園の世話係りの某氏が、外国の植物園から寄せられたアマゾン川の大鬼蓮の種子を畠にまいたという珍談なども、先生の口をついて出るなどなかなか楽しい散歩であったし、園内でも採集することを許されたので、私の旅の目的の一つは十分にかなえられた。

当時の札幌は、いまのように人家が櫛比していないで、半自然状態であったので、本州では稀品であったヤナギトラノヲやミヅドクサなどは、町の中で採集できたのは嬉しかった。またある日、先生の助手の近藤金吾君がテイネやホロムイに案内して、私の採集欲を満たしてくれたり、竹田君はモイワナヅナの産地の藻岩山に案内してくれたり、植物好きの学生の、松尾悌治郎君は、当時道もろくろく無かった手稲山へ連れて行ってくれた。僅か一、〇二四メートルのこの山上にはハイマツが生じ、西側の岩壁には、エゾイワベンケイを始め、イワウメ、ミヤマハンショウヅル、コケモモなどの高山植物が見られ、また測量櫓の上から目を放つと、天狗岳の彼方にはマクカリヌプリを望むことができた。

この山については、この年の春に、蝦夷富士登山会会長の河合篤叙氏が上京の折り、日本博物学同志会の第六回総会において、くわしい話しを行なったので、特に興味をもって眺めた。同氏の講話によると、この山を後方羊蹄山（シリベシ）というのは、傍にある尻別山の名が間違って移動したそのうえ、ツがシと訛ったのだというから、マクカリヌプリのエゾ名がいやなら、蝦夷富士と呼んだ方が安全であり、羊蹄山などと舌足らずの名称は、抹殺し去った方が清々してよろしかろう。

滞在もやがて二週日に余り、札幌を去ることとなった、世話になった方々や、近づきになった方々を訪ねて暇乞いをし、各種のアイヌ細工を土産に買い求め、七月一日の朝六時二十分の炭礦鉄道の列車に搭じ、新旧の友人等に見送られて札幌を後にした。曩日、手稲登山のリーダーであった松尾君も、銭函にハマフウロを採るために同車した。この人はその年の九月五日銭函の海で溺死したのは気の毒千万である。小樽駅で北海道鉄道に乗換え、夕の八時三十分に函館に着。待っていてくれた竹田君と共に田子ノ浦丸に乗って青森に向った。

（文化財専門審議会専門委員）